

## 〈研究ノート〉

# イギリスにおけるシク教徒移民 Sikh Diaspora に関する研究動向\*

藍 澤 光 晴

## は じ め に

インド・パキスタン分離独立が、シク教徒出自の地であったパンジャブ地方の分割の歴史的契機となり、シク教徒の海外移住者 Sikh Diaspora<sup>1)</sup>を多数産み落とした<sup>2)</sup>。とくに、イギリスとの繋がりが強固であった<sup>3)</sup>彼／女らは同時にイギリス多民族・多文化社会<sup>4)</sup>を構成する一要素でもある。そこで、イギリスにおけるシク教徒移民の研究は、昨今の多文化共生の掛け声と共に、深化の度合いを深めつつある。さらには近代世界の構造的解明の一助となり得るであろう労働力移動の研究と相俟って、イギリスを中心にこの分野での研究は、インターあるいはマルチ・ディシプリナリーな様相を見せはじめ、実証的・理論的、ミクロ的・マクロ的研究が専門領域を越えて進められている。

そこで、本稿において、この分野での過去の研究状況を整理し、これからの研究への展望に繋げることを第一の目的とする。

なお、その他の重要文献についても適宜脚注に表記する。

---

\* 本稿は、草稿の段階で世界システム研究会（2002年2月25日開催）のメンバーによる貴重な意見も含まれている。記して御礼申し上げる。なお本稿における誤謬は全て筆者である私に帰するのは言うまでもない。

- 1) Diaspora に関する理論的な規定については、コーエンの著作（Cohen 1997）に見受けられる。つまり①「被害」ディアスポラ（ユダヤ人、アフリカ人、アルメニア人）②「帝国」ディアスポラ（イギリス人）③「労働」ディアスポラ（インド人）④「交易」ディアスポラ（中国人、レバノン人）⑤「文化」ディアスポラ（カリブ海地域の人々）と類型化されている。以上のように「コーエンによるこの分類は示唆に富むものであるが、時代の違いやそれぞれの移民が行われた歴史的状況が背景に押しやられ、ともするとディアスポラの型が民族の資質や性格に帰着するかのような誤解を招く危険性があるなど、このままでは受け入れるにはいくつかの難点があるように思える。しかし、移民の類型化を試みるとき、彼が指摘するように、特定の移民がしばしば複数の範疇に属することを見落としてはならないだろう。」（古賀，内藤，浜口編2000：i-ii）
- 2) イギリスにおける南アジア系移民は、1987年段階で126万人は存在していると試算されており（Clark, Peach and Vertovec 1990：2-3），その中でもシク教徒は1990年現在で約50万人存在していると試算されている（Tatla 1999：42-43）。
- 3) 大英帝国とシク教徒の関係については（長谷2000：151）または（Helweg 1986a：368）を参照せよ。
- 4) イギリスにおける多民族，多文化社会に関する研究として（Goulbourne 1991）が参照されるだろう。

## I 海外の研究動向

本章ではイギリスにおけるシク教徒移民に関する海外での研究動向を取り上げる。とりわけ、シク・ディアスポラのホスト社会との接触を通じ、イギリスでのシク・アイデンティティの変容とシク文化の新たな展開における研究成果について紹介する。なお、イギリスにおけるシク教徒移民の史実に関する研究は、バラードやヘルウェッグ (Ballard and Ballard 1977), (Helweg 1980a) 等による成果がある。さらに以下で取り上げる文献においても、史実に関しては、これらの研究成果を踏まえた研究が進められている。つまり、民族、ナショナリズム、国民国家などに関する最近の積極的な議論をフォローするためシク・ナショナリズムのイギリスでの展開についての研究が進展している。ゆえに以下においてはそれら近代以降に強調され、近代の理念を支えつづける「近代的言説」を意識した研究実績について紹介したい。

### i *Agnihotri, R. G., Crisis of Identity: The Sikhs in England, New Delhi, 1987.*

本書はイギリスのリーズ地方におけるシク教徒の移住過程の歴史を実証的なデータやマクロ的な事例の分析（リーズのシク教徒移民における包括的な考察）を通して叙述し、さらに文化的な考察を試みる研究として位置付けられる。とくに1960年代に急増するシク教徒移民の歴史的な背景の解明、つまり連鎖移民 Chain Migrations の実態、1962年、1968年と段階的にカラード移民のイギリス本国への入国を規制するための英連邦移民法の制定を見越した、いわゆる「駆け込み」移民の実態、そして1960年代から1970年代にかけてのアフリカの相次ぐ独立による二次移民 Twice Migrants<sup>5)</sup>のイギリスへの入国の実態を実証的なデータに基づいて叙述し、最終的に文化体系の重要な要素であるシク教徒の言語であるパンジャブ語の危機を指摘している。つまり、著者はシク教徒の第一言語の英語化に伴うシク・アイデンティティの象徴の一要素であるパンジャブ語の忘却を指摘している。著者は、シクの英語の初等教育レベルでの能力の高さについては指摘しながらも、文化的な危機を強調し、イギリスはエスニック・マイノリティの文化を保護するような教育制度の導入を行い、イギリス文化と同様にエスニック・マイノリティの文化も同じように認める必要がある、と結論付ける。これは、多文化共生への対応としての一主張ではあるが、多民族国家であるイギリスが抱えている問題への解決の糸口にはなり得ないだろう。なんとすれば、民族、国民国家などの言説がイデオロギー的な意味合いを多分に含み、歴史的に近代以降に強調されつつ展開されたのであるが、それら近代以降に強調され、近代の理念を支えつづける「近代的言説」への歴史的な考察が、十分になされていないばかりか、いたずらに“エスノ・ナショナリズム Ethno-Nationalism”が強調されているからである。イギリス国家によるマイノリティ文化の保護は、文化至上主義による偏狭なナショナリズムの展開を促進し兼ねない。

5) 東アフリカ経由でイギリスへ再移住するシク教徒、いわゆる二次移民に関する研究として (Bhachu 1985) が参照されるべきである。

もっとも本書が丹念にシク教徒のリーズへの移住過程を実証的なデータを裏付けに述べている点については積極的に評価されべきであろう。しかし、社会、国民国家とナショナル・アイデンティティとの関わりについてや矛盾への解決は極めて楽観的である。すなわち、文化間対立に起因するナショナリズムの偏狭化に伴う民族対立の重要性についてはほとんど指摘されていない。

以上のように本書は、著者によるフィールド調査（主に聞き取り調査）で詳細に連鎖移民や駆け込み移民の実態をミクロ的に裏付け、リーズ地方のシク教徒移民の実態解明への貢献は積極的に評価されてしかるべきであろう。しかし、マクロレベルでの理論分析（近代的言説に関する考察）が希薄であるという事実は否めず、今日的な問題としての交錯する国民、民族などへの解決策を提示はしていない。さらに、シク・ナショナリズムのイギリスでの勃興と変遷についての一貫した研究成果であるとは言い難い。したがって本書はシク・ディアスポラを一面的にしか把握しきれていない。つまり、ホーム社会とホスト社会との関係性でディアスポラの現象は把握されるべきであって、ホスト社会によるディアスポラへの一方的な抑圧という視点のみを強調する結論となってはならないのである。

**ii-a Helweg, A. W., 'Indians in England: A Study of the International Relationships of Sending, Receiving and Migrant Societies' in Studies in Migration: *Internal and International Migration in India*, Rao, M. S. A. (ed.). Delhi, 1986.**

本論文は、グラベセンドのインド系移民の歴史的展開をホスト社会とホーム社会との関係の中で描写し、とくにシク教徒の海外移住者 Sikh Diaspora の文化変容のプロセス解明を目指すものとして画期的である。まずインド系移民の移住過程を定住化に到るまでの四段階、すなわちプレ移住局面 The Pre-migration Phase, 自由局面 The Freedom Phase, 衝突局面 The Conflict Phase, 定住局面 The Settlement Phaseに分けている。そして、各局面でシク教徒移民 Sikh Diaspora のシク文化のイギリスでの再構築とイギリス生まれのシク教徒のアイデンティティ形成を照射する。

1950年代、パンジャブからのいわゆる単身「出稼ぎ」労働者は、シク教徒の象徴である長い髭と髪そしてターバンを捨て、工場労働に従事した。やがてホスト社会との衝突と連鎖的に移住してくるシク教徒による家族の呼び寄せにより、イギリスでのシク文化の再構築が進められ、パンジャブとの繋がりが強化され、シク教徒としてのアイデンティティが確立する。しかし、定住化の進展とイギリス生まれのシク教徒が出現し始めるとパンジャブとの歴史的連続性から離れ、ホーム社会とディアスポラとは断絶に向かい、イギリスにおけるシク教徒としての新たな立場、自画像が築かれていく。

本論文は、このようにパンジャブとの断絶と連結を繰り返しながらイギリスでのシク教徒として独自の自画像を獲得する過程を描き、さらに定住化までの歴史的な考察を通して、シク文化の変容と確立に関する理論的な分析を試み、ホスト社会とホーム社会との関係の下で新たに展開する移民 Diaspora 文化を一元的な把握から開放した。したがって〈マジョリティによるマイノリティ文化への抑圧〉という単純な構図を拒絶し、移民 Diaspora 文化のホスト社会での新たな

展開に光を当てる重要な視座を提供している。これはディアスポラのホスト社会でのナショナリズムの覚醒と変容がホーム社会との関係で語られることの重要性を示唆し、ディアスポラ現象におけるホスト、ホーム社会との相互規定性へのアプローチの必要性を明示している。

**ii-b Helweg, A. W., *Sikhs in England*, Oxford University Press, 1986.<sup>6)</sup>**

1981年段階、グラベセンドはその人口の8%に当たる7,797人の移民から成り立っており、その内訳はパキスタン出身者が127人、カリブ人279人、そして残りの全てがインド出自の者であり、その大多数がパンジャーブ・シク、とりわけ Jat<sup>7)</sup>シクから構成されている。このようにシク教徒移民が多数を占めるグラベセンドの歴史を俯瞰し、シク教徒移民の文化的な変容や、シク・イズム（集合心性、雰囲気＝ナショナリズムを想定する思考、行動様式）に対する世代間の認識の“ズレ”を詳細に分析しながら、彼／女らの新たな文化的な結びつきを本書は研究している。

1980年代イギリス生まれのシク教徒のアイデンティティ形成に大きな変化が見られ始める。西洋的な個人主義の浸透により、各地域毎のシク・コミュニティでのシク・アイデンティティの強制、すなわちシク寺院などによるアイデンティティの形成と維持は、家族単位によるものにとって代わられた。さらにパンジャーブへの送金<sup>8)</sup>を通しての“エスノ・ナショナリズム Ethno-Nationalism”の維持は、パンジャーブ経済のインフレーション惹起に起因する送金総額の低下がもたらしたパンジャーブとの関係の希薄化により、新たな展開が見受けられ始めた。つまり初期の送金よパンジャーブに居住している家族の健康維持や生活必需品に投下されるのだが、やがてそれらが満たされると土地や家屋への投資に送金が振りかえられ、そのことが地代の上昇を招き、最終的にインフレーションを引き起こし、送金の低下に繋がり、パンジャーブとイギリスにおけるシク教徒との関係性が希薄になり、結果としてシク・アイデンティティの新たな展開が見受けられ始める。パンジャーブとの連続性、繋がりが希薄になるにつれ、イギリスにおけるシク教徒は独自の自画像、つまりパンジャーブ・シクの文脈から離れた、いわば“英国型シク・アイデンティティ”を獲得し始める。そのことがイギリスでのカリスタン運動 the Khalistan Movement<sup>9)</sup>の展開を生じさせたマイノリティとイギリスへの貢献を標榜するシク教徒のマジョリティとのアンビバレントな形態を構築したのである。

以上本書はグラベセンドにおけるシク教徒移民の端緒から定住化までの歴史を描写し、イギリス社会（ホスト社会）でのシク・アイデンティティの変容と新たな展開を考察し、イギリスにおけるシク教徒を全体的かつ包括的に分析したものとして古典的な名著になり得るであろう。

6) 本書は著者の博士論文を基に初版が1979年に出版され、1986年の第二版で新たに1979年以降のシク教徒に関する模様の記述が追加され、それを踏まえた結論が付与されている。

7) Jat とはパンジャーブ地方の富農カーストであり、パンジャーブから直接イギリスに移住してきたシク教徒の殆どがこのカーストに属している。

8) アジア人移民労働者による“故郷”への送金とその地域の経済状況の変化を論じたものとして (Stahl and Arnold 1986) が参照される。

9) カリスタン Khalistan とは「純粋な土地」の意であり、シク教徒による独立国家の名称として考えられている。

iii Ballard, R., 'Differentiation and Disjunction among the Sikhs', in *Desh Pardesh: The South Asian Presence in Britain*, Ballard, R., (ed.), London, 1994, pp. 88-116.

本論文において著者は、イギリスにおけるシク教徒コミュニティの形成史を記述し、第二世代の登場と1984年6月のパンジャブでの事件を経たシク・コミュニティの形態を描き出し、最終的にイギリスにおけるシク・コミュニティの多様性に言及している。

第二次世代、つまりイギリス生まれのシク教徒の出現によりシク・イズムの展開は、西洋的な個人主義の浸透の結果、コミュニティによるシク教の教化から変貌を遂げた。シク寺院などによるいわゆる「全体」を通じて自画像を描く従来の方式から家族、個人によるシク・イズムの伝承へと変容したのである。さらに第三世代の登場はパンジャブ語の忘却という決定的な世代間ギャップを生じさせた。また1984年6月インド軍によるパンジャブのシク寺院の総本山である黄金寺院 Golden Temple への軍事進攻によって、原理主義的な過激派の登場によりイギリスのシク教徒は分裂することとなった。すなわち過激な国家要求運動 the Khalistan Movement を展開する若干のシク教徒<sup>10)</sup>とイギリス社会でいわゆる「成功」したマジョリティとの分裂と、世代間ギャップで生じた相異とが現在のシク・コミュニティの多様性へと繋がっていると指摘している。

本論文は、以上のようにイギリスにおけるシク・アイデンティティの変容をイギリス社会との接触とホーム社会との衝突を契機にシク・コミュニティの新たな質的变化の局面までを抽出している。すなわち著者は、シク・ディアスポラの歴史的経過に伴い、シク教徒が分化を経験し、多様なコミュニティを形成したことを示唆した。それは、従来のイギリスにおけるシク教徒を全体として把握する研究手法の見直しを意味する。つまり、世代別、カースト別、家族単位による、よりミクロ的な分析手法を必要としているのである。

## II 長谷安朗氏の研究成果

ロンドンのイーリング特別地区のサウスオール Southall は現在シク教徒が多数居住している地域として有名であり、リトル・パンジャブとも称されている程である。とくにサウスオールにはかつてパンジャブからのシク教徒が多数労働に従事した Woolf's rubber factory が存在しており、さらにサウスオールはロンドン北西部の工業地帯と隣接していることもあって、ロンドンにおけるシク・コミュニティの典型例として長谷安朗氏によって研究がなされている。

長谷は、サウスオール地区でのシク・コミュニティの形成史を記述した二つの論文<sup>11)</sup>を通じ、今

10) なお本論文ではカリスタン運動を牽引するシク教徒のカーストとしてパンジャブより直接移住した Jat カーストがその大多数を占めている事実が指摘されており、いわゆる二次移民が多数を占める職人カーストとの分裂が記述されている。

11) 長谷安朗「地域紙および投票者リストを通じてみるロンドン（サウスオール）におけるインド人コミュニティの形成史ならび地域住民の反応：定住化初期の10年間（1950年代後半～1960年代前半）を中心に」内藤雅雄編『南アジア系移民社会の歴史と現状：イギリス連邦諸国を中心に』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1996年、pp. 149-194. ↗

日の多文化、多民族教育に通じるような政策が実行された模様を描写する。具体的に、イギリス社会が持っている人種差別的な体質への法的な処置、つまり1965年、1968年、1976年の三度にわたる人種関係法の制定、改正を通して、人種差別に対するイギリスの法的な努力、さらに教育制度に関しても既に1960年代初頭には隔離教育の拒否を打ち出すなどの試みがなされたことをよく叙述している。しかし、その一方でイギリス社会でのシク教徒のアイデンティティの先鋭化、換言すればシク・ナショナリズムの偏狭化、さらにはヒンドゥー、ムスリムとの分化の鮮明化を強調する<sup>12)</sup>。とくに、ターバン着用を理由にした私立学校への入学取消しをめぐる裁判、1970年代から80年代にかけてのイギリスにおけるシク教徒国家要求であるカリスタン運動 the Khalistan Movement の展開を通じて、イギリスでのシク教徒のアイデンティティの確立が、より明確なカタチで進行している事実が指摘されている。これは多文化共生、グローバル化時代における民族関係などの今日的な問題を実証的に把握するものであり、民族問題の歴史的な形成過程の解明とその理論的な背景への解決の糸口を示唆している。

以上、長谷川氏の研究は、サウソールにおけるシク・ディアスポラを照射しているのだが、とりわけその対象は、イギリス政府の移民への対応とそれを受ける南アジア系移民の反応であり、その差異を各宗教別、すなわちヒンドゥー、ムスリム、シクの比較することにより、シク教徒の独自性を探り出している。とくに1970年代から高まりつつあったイギリスにおけるシク教徒による国家要求やパンジャブ地方の自治権要求の気運と1983年の最高裁判決によるシク教徒の「人種集団」としての概念規定などでそれぞれの宗教の個別化が進行したことを明らかにしている。このようにイギリスにおける南アジア系移民の多様性を主張することで、シク・ナショナリズムの独自性を考察する点において画期的である。

### III 新たな研究動向

**Tatla, D. Singh, *The Sikh diaspora : The search for statehood*, URC press, London, 1999.**

本書は、海外のシク教徒 Sikh Diaspora とパンジャブとの歴史的な関係性をホスト社会の文脈のなかで位置付け、カリスタン運動の展開と1984年6月のインド政府によるパンジャブのシク総本山 Golden Temple への軍事侵攻、いわゆるブルー・スター作戦 the Operation Blue Star の決行をグローバルな視点で描き出している。パンジャブ経済の発展さらにはカリスタン運動の成熟の原動力を海外在住のシク教徒 Sikh Diaspora に求め、偏狭なシク・ナショナリズムの展開が、とくにイギリスにおいては1970年代の一部のシク教徒によるカリスタン運動が、海外在住のシク教徒とイギリス、インド両政府との関係の中で描かれている。最終的にシク教徒をめぐる

ⅴ 長谷安朗「イギリスの『リトル・パンジャブ』—サウソール」古賀正則、内藤雅雄、浜口恒夫編『移民から市民へ：世界のインド系コミュニティ』東京大学出版会、2000年、pp. 149-168.

12) イギリスにおける南アジア系移民の宗教的な特徴を論じたものとしては (Knott 1991: 86-111) が挙げられる。

問題、カリスタン運動やテロリズムは、大英帝国を中心とした植民地主義を現代にまで持ち込んでいる結果として考察がなされている。

1984年6月以降、イギリスでのカリスタン運動の展開は、原理主義的な運動に変化した。つまり一部の過激派によってカリスタン運動は牽引されることになった。例えば、1984年9月23日にジャスヴィール・シング Jasvir Singh<sup>13)</sup>が発足させたシク教徒青年国際連盟 the International Sikh Youth Federation などがそれである。一部過激なシク教徒によるカリスタン運動の展開は、国際問題にまで発展したのだが、1984年6月のインド政府によるブルー・スター作戦以降、イギリスにおけるシク教徒の大多数の諸政治団体はカリスタン運動への深い介入を回避し始めた。なぜなら既にホスト社会での生活が日常の大部分を占めるまでに至っているディアスポラにとっては、ホスト社会との連携で“平等な分け前”を希求することの方がより現実的になりつつあったからである。その反面、急速な通信網の発展によりパンジャープの政治・経済の行方は、シク・ディアスポラが広範囲に影響を行使している。したがって、そのような文脈で1984年の事件は、パンジャープとの新たな関係とイギリスのシク・ナショナリズムの展開を促した。この新たなシク・ナショナリズムの展開の契機となった1984年の事件は、シク教徒にとって民族的心理的な ethno-psychological トラウマとして深くその心に刻み込まれている<sup>14)</sup>。

さらに本書は、近年のインターネットの流行によって CD ロム等によるシク・イズムの継承が図られている事実や、それに付随した近年のシク・ナショナリズム展開について、活発な議論の模様も紹介している。すなわち、このような視覚媒体によるシク・イズムの教化は、イギリスによるパンジャープ地域の植民地化からインド・パキスタン分離独立に到るポスト植民地時代に想像／創造されたに過ぎないのだから、単に新たなナショナリズムの再構成と再分配によってナショナリズムの偏狭化を招くに過ぎないと主張されている。他方で海外在住のシク教徒は、パンジャープ社会との繋がりの中で、つまりシク・ディアスポラはパンジャープ経済や社会の影響下でホスト社会と関係し、パンジャープ経済、社会に影響を及ぼし、いわば相互規定の中で考察されるべきだとも主張されている。しかしながら、前者と後者は決して対立するものではない。つまり、パンジャープの植民地化からポスト植民地時代にシク・ナショナリズムは強調／強化されたのは事実ではあるが、それを促した原動力は植民地支配という西洋近代、なかんずくイギリスである。ゆえに、イギリスとパンジャープとの相互規定のなかでシク・ディアスポラの現象を捉える必要があるだろう。

このように植民地時代とポスト植民地時代との比較検討によってシク・アイデンティティがいかに様に変容し、またシク・ディアスポラとパンジャープ・シクとの比較を通しての新たな研究地

13) ちなみにジャスヴィール・シングをめぐるイギリス政府は大いに揺れ動くことになる。1984年12月14日イギリス政府は彼の入国を拒否したが、その事実の裏にはインド政府による彼の引き渡しを求める圧力が存在しており、イギリス政府はインド貿易からの利益確保のために彼の入国を拒否した。その事実関係の詳細は1985年1月17日付けのガーディアン紙 (the Guardian) に取り上げられている (Gill 1985)。

14) とくに、この点については (Thandi 1996: 241) を参照した。

平が切り開かれようとしている<sup>15)</sup>。

#### IV 展望：むすびにかえて

1984年6月の事件以来、イギリスを中心としたシク・ディアスポラの一部は、過激なカリスタン運動を牽引したのだが、多くの彼／女らは、心情的にはこのようなカリスタン運動に共感しながらも、サイレント・マジョリティとしてホスト社会での経済的、社会的な地位向上に努めている。とくに、勤労や平等の精神がその教義であったシク教徒は他の南アジア系移民と比べ、いわゆる経済的な成功をおさめたものが多い。さらに、政治的にもイギリスの権力システムを利用している。例えばサウソールやブラッドフォードなどのシク・コミュニティは労働党支持を打ち出すなどしてイギリス社会に積極的に介入している。このようにして、イギリスにおけるシク教徒は、新たな民族集団としての地位を築いている。

近年の新たなシク・ナショナリズムの展開を把握するためには、海外在住のシク教徒 Sikh Diaspora とパンジャブとの関係のなかで変容するシク・アイデンティティについての研究が多分に必要とされている。大英帝国に取り込まれる以前のシク教徒のアイデンティティ形成から植民地時代、ポスト植民地時代までを通して多数のシク・ディアスポラの形成、ホスト社会でのアイデンティティの展開と変容までを一貫させた研究成果が望まれる。その研究の構成要素には、民族、ナショナリズム、国民国家などの近代的な言説も含まれ、グローバリズムとローカリズムとの関連性も含まれている。それは綿密な理論的把握とフィールド調査を通じた現象把握との一体化した研究スタイルを要求している。

#### Bibliography

- Agnihotri, R. K., *Crisis of Identity: The Sikhs in England*, New Delhi, 1987.
- Alexander, M., and S. Anand, *Queen Victoria's Maharajah Duleep Singh, 1838-1893*, London, 1979.
- Appadurai, A., *Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology*, Fox, R., (ed.) *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Chapter 10, Santa Fe: School of American Research Press, pp. 191-210.
- Aziz, K. K., *The Making of Pakistan: A Study in Nationalism*, London, 1967.
- Ballard, R., and Ballard, C., The Sikhs: The Development of South Asian settlement in Britain, in *Between Two Cultures: Migrants and Minorities in Britain*, Watson, J. L., (ed.) Basil Blackwell, Oxford, 1977.
- Ballard, R., The context and consequences of migration: Jullundur and Mirpur compared, *New Community*, vol. 11, No. 1/2 1983, pp. 117-136.
- Ballard, R., and Vellins, S., South Asian entrants to British universities: a comparative note, *New Community*, Vol. 12, 1984, pp. 260-265.
- Ballard, R., Migration and kinship: the differential effect of marriage rules on the processes of Punjabi

15) グローバル時代のディアスポラの文化再生産についての理論的な文献として (Appadurai 1991: 191-210) が参照されるべきである。



- migration to Britain, Clarke, C., Peach, C., and Vertovec, S., (eds.) *South Asians Overseas: Migration and ethnicity*, Cambridge University Press, 1990, pp. 219-249.
- Ballard, R., Differentiation and Disjunction among the Sikhs, Ballard, R., (ed.) *Desh Pardesh: The South Asian Presence in Britain*, London, 1994, pp. 88-116.
- Bhachu, P., *Twice migrants: East African settlers in Britain*, London, 1985.
- Bhachu, P., The East African Sikh Diaspora: The British Case, Vertovec, S., (ed.) *Aspects of The South Asians Diaspora: Oxford University Paper on India volume2 part2*, Oxford University Press, Delhi, 1991, pp. 57-85.
- Clarke, C., Peach, C., and Vertovec, S., (eds.) *South Asian Overseas: Migration and ethnicity*, Cambridge University Press, 1990.
- Cohen, R., *Global Diasporas: An Introduction*, Washington, 1997.
- Dahya, B., The Nature of Pakistani Ethnicity in Industrial Cities in Britain, Cohen, A., (ed.) *A. S. A. Monograph No. 12, Urban Ethnicity*, London, 1974.
- Dusenbery D. A., A Sikh Diaspora? Contested Identities and Constructed Realities, Peter van der Veer (ed.) *Nation and migration: the politics of space in the South Asian diaspora*, University of Pennsylvania Press, 1995.
- Fox, R. G., *Lions of the Punjab: culture in the making*, University of California Press, 1985.
- Gill, M., when the British judiciary does just what India pleases, *The Guardian*, 17, January 1985.
- Gillespie, M., Television, *Ethnicity and Cultural Change*, Routledge, London, 1995.
- Goulbourne, H., *Ethnicity and nationalism in post-imperial Britain*, Cambridge University Press, 1991.
- Grewal, J. S., *The Sikhs of the Punjab*, Cambridge University Press, 1990.
- Helweg, A. W., Sikh immigrants in England, *world Minorities*, III, 1980a, pp. 147-151.
- Helweg, A. W., Revitalization in immigrant societies: the Sikhs in England, *Proceedings of the Heracleitan Society*, V, 1980b, pp. 58-59.
- Helweg, A. W., Indians in England: a study of the interactional relationships of sending, receiving and migrant societies, Rao, M. S. A., (ed.) *studies in migration: internal and international migration in India*, Delhi, 1986a.
- Helweg, A. W., *Sikhs in England*, Oxford University Press, 1986b.
- Keely, C. B., and Tran, B. N., Remittances from Labor Migration: Evaluations, Performance and Implications, *International Migration Review*, XXIII (3), Fall, pp. 500-525.
- Knott, K., Bound to Change? The Religions of South Asians in Britain, Vertovec, S., (ed.) *Aspect of The South Asians Diaspora: Oxford University Papers on India Vol.2 part2*, Oxford University Press, New Delhi, 1991, pp. 86-111.
- Koga, M., Hamaguchi, T., and Naito, M., (eds.) *South Asians in the United Kingdom, Tanzania and Canada: Statistical Data from Surveys*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 1992.
- Kosmin, B. A., London's Asian MPS: the contrasting career of three Parsee politicians. *Indo-British Review* 16(2), 1989, pp. 27-38.
- Macdonald, I., *Immigration Law and Practice in the United Kingdom*, London, 1987.
- Mangat, J. S., *A History of the East Africa, c. 1886-1945*, Oxford, 1969.
- Marsh, P., *Anatomy of a strike: unions, employers and Punjabi workers in a Southall factory*, London, 1967.
- Miles, R., *Europe a New Immigration Continent: Policies in Comparative Perspective*, Hamburg, 1992.
- Popplewell, R., The surveillance of Indian revolutionaries in Great Britain and on the Continent, 1905-1914.

- Intelligence and National Security* 3(1), 1988, pp. 56-76.
- Robinson, V., *Transients, Settlers, and Refugees: Asians in Britain*, Oxford University Press, 1986.
- Samad, Y., Pakistan or Punjabistan: Crisis of National Identity, Singh, G., and Talbot, I., (eds.) *Punjabi Identity Continuity and Change*, Manohar, New Delhi, 1996, pp. 61-86.
- Singh, G., *Duleep Singh's correspondence*, Punjabi University, 1980.
- Silverman, J., The India League in the freedom movement. *Indo-British Review* 16(2), 1989, pp. 47-56.
- Spencer, R. G., *Immigration Policy since 1939*, London, 1997.
- Stahl, C. W., and Arnold, F., Overseas Workers' Remittances in Asian Development, *International Migration Review*, XX (4), Winter, 1986, pp. 899-925.
- Tatla, D. S., and Nesbitt, E. M., *Sikhs in Britain: An Annotated Bibliography*, Bibliographies in Ethnic Relations, NO. 13, Centre for Research in Ethnic Relations, University of Warwick, Coventry, 1994.
- Tatla, D. S., *The Sikh diaspora: The search for statehood*, London, 1999.
- Thandi, S., The Punjabi Diaspora in the UK and the Punjab Crisis, Singh, P., and Barrier, N. G., (eds.) *The Transmission of Sikh Heritage in the Diaspora*, Manohar, New Delhi, 1996, pp. 227-252.
- Twaddle, M., East African Asians through a hundred years, Clarke, C., Peach, C., and Vertovec, S., (eds.) *South Asians Overseas: Migration and ethnicity*, Cambridge University Press, 1990.
- 今村仁司『排除の構造：力の一般経済序説』ちくま学芸文庫，1992年
- 中村平治編『インド・パキスタン分離独立の史的研究資料集』昭和50年度科学研究費補助金総合研究（A）——中間報告——，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1976年
- 内藤雅雄「東アフリカにおける『インド人問題』：1920年代のケニヤを中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究所』48・49号合併号，創立30周年記念号2，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1995年，pp. 111-135.
- 長谷安朗「地域紙および投票者リストを通じて見るロンドン（サウソール）におけるインド人コミュニティの形成史ならびに地域住民の反応：定住化初期の10年間（1950年代後半～1960年代前半）を中心に」内藤雅雄編『南アジア系移民社会の歴史と現状：イギリス連邦諸国を中心に』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1996年，pp. 149-194.
- 長谷安朗「イギリスの『リトル・パンジャブ』——サウソール」古賀正則，内藤雅雄，浜口恒夫編『移民から市民へ：世界のアジア系コミュニティ』東京大学出版会，2000年，pp. 149-168.
- 富永智津子，宇佐美久美子「東アフリカのインド人：歴史と現状」古賀正則，内藤雅雄，浜口恒夫，同上，pp. 72-113.
- 保坂俊司『シク教の教えと文化：大乘仏教の興亡との比較』平河出版，1992年

（受付 2002年5月13日）